

(特集) 沖縄へスリサーサー ジンブンよせあって、二二世紀の自治・文化・地域社会を創ろう

## 沖縄の社会教育の現在―個性をみすえて

中村 誠 司

はじめに―沖縄へスリサーサー！

今年、沖縄が日本に復帰して（施政権が米国から日本に返還されて）三〇年の節目の年である。

この節目の年に、昨年の新潟県聖籠町での越佐集会受到継いで、沖縄・名護市で第四二回全国集會を開催することに、私たちは深い感慨を覚える。沖縄集會が発案されて一〇年近くたつだろうか。本土の人々が沖縄に寄せる熱い思い、とりわけ日本各地で社会教育実践の現場

におられる方々の好意とかわりは、沖縄の私たちにとってありがたい励ましであった。沖縄では、各地の社会教育関係者のネットワークが弱く、また社会教育研究者はきわめて少ない。紆余曲折があつたが、この八月末に全国集會を開く。

沖縄・名護市集會に参加しておもしろい、楽しいと感じていただけのように、全体プログラムや分科会の演出にジンブン（英知）を出しあつているところだ。本号に紹介されているように、数多くの分科会は、会場の設定、ワークショップや音楽・パフォーマンスなど、かなりお

もしろくなりそうである。

どうぞ、「沖繩ヘスリサーサー」、沖繩へおいでよ。沖繩に集まろうよ。

## 復帰世論調査から

今年四月に実施された沖繩と全国の世論調査によると（沖繩タイムス社・朝日新聞社／「沖繩タイムス」二〇〇二年五月一二日付）、沖繩県民の八七パーセントが日本に復帰してよかったと評価している。しかし、なお七四パーセントの県民が本土との格差を感じている。その内訳は、基地問題が多く、所得・就職・教育の順に高い。

米軍基地の段階的縮小と撤去を望む人は八七パーセント、基地の県内移設については六九パーセントが反対の意見である（全国は五七パーセント、ただし本土移転には反対）。また、日米地位協定改定に賛成する人は九〇パーセントに達する。

現在の不況については、沖繩でも九割以上が不況を実感している。一方、沖繩の七割の人が、基地は沖繩の経済に役立っていると評価している。今度の沖繩振興特別

措置法によって県経済が発展することへの期待感は七三パーセントと高い。今後の重点産業の選択は観光が高く、近年の政策課題である情報・金融のほか、亜熱帯農業・健康産業・伝統工芸にも期待が寄せられている。

## 沖繩の個性とその歴史的・文化地理的背景

沖繩の個性をみていく際、いくつかの視点がある。まず、沖繩県は一六〇余の島々、うち四六の有人島からなる島嶼地域であり、亜熱帯海洋性の自然条件のもとにあることである。サンゴ礁ややんばるの森など、沖繩の自然と生きものたちは豊かで貴重だが、小さな自然のため人為的な影響を受けやすい。沖繩に特有な環境問題・自然保護問題がある。

数千年の時間で見ると、日本（特に九州）との交流が続いてきた。文化の基層をなす言語についてみると、本土方言と対比される琉球方言は、島ごとに異なるほど多様である。その地域的多様さは、ここ千年の歴史過程の中で、文化や社会についてもいえる。

一四二九年に沖繩本島を中心に琉球王国が成立し、以

降一八七九年まで四五〇年間、小さくても東シナ海における独立国家として存続した。その間、半ば従属関係ではあったが、王国レベルで日本・中国との関係が持続し、また文化面でもさまざまな交流と受容があった。島国だから、外からの大きな文化や制度を受け容れたが、それを取捨選択し沖繩化してきたところに特色がある。いわゆるチャンプルー文化である。現在沖繩の伝統文化といわれる芸能や工芸・文芸・食文化などは、近世において王国レベルで磨きあげたものである。それらが地方庶民レベルに普及しはじめるのは一九世紀からである。

近世王符の租税・地割制度などの諸体制は、沖繩内での人々の移動と交流を抑制するものであった。また、各集落には祖先である御嶽のカミがおられ、それをめぐって地域の信仰と祭祀、年中行事が催されてきた。司祭者は集落の女性の神人である。このような中で、地域社会は内側にかたまる傾向が強く、シマ社会が形成された。細かくみると、シマ（字・集落）ごとに言葉が異なるといわれるのも、こうした歴史過程によるものと考えられる。

日本は一八七九年に軍隊を派遣して沖繩県を設置（琉

球処分）するが、その後四半世紀は旧慣を温存させた。小学校は早く、三年後に各間切（市町村）に一校ずつ設置する。地割制度が廃止され、地租改正が実施されたのは二〇世紀初めである。それにより、沖繩は経済・社会の大混乱状況に入るとともに、急激に近代化の過程を歩む。本土や海外への出稼ぎが急増する。

沖繩戦は二〇万人をこえる住民と軍人の犠牲者をだすとともに、地上にあるものすべてに莫大な損害をもたらした。沖繩戦の経験は、沖繩人の反戦・平和観を形づくった。

沖繩は戦後二七年間、米軍の支配下におかれ、主権なき一地方として生きざるをえなかった。軍事基地の島として機能が固定され、現在も基地問題が根強く存在する。基地の中の沖繩から脱却し、平和国家日本を求めて、一九六〇年代祖国復帰運動に青年たちをはじめ多くの人々が参加した。米軍基地の存在は、私たちにとって日常的に脅威であるが、アジアや中東への発進基地であり、国家的な緊張を高めている。

復帰後すでに三〇年がたち、戦争を知らない世代に加え、復帰を経験しなかった若い世代が人口では多くを占

めるようになった。戦後沖繩もいよいよ新しい時代となった。

## 現代のウチナーンチュ（沖繩人）とは？

昨年一二月、琉球新報社は、生活意識、人間関係、儀礼・慣習、郷土意識、文化意識、社会・政治意識の六分野二八項目について沖繩県民の意識を調査した（『沖繩県民意識調査報告書』琉球新報社、二〇〇〇年）。ウチナーンチュとはなにか（県民性）を理解するうえで興味深い資料なので、見出しを拾いつつ概要を紹介する。

まず、沖繩県民の三分の二は今の生活に満足しており、三人に一人は将来を楽観している。現在の暮らしの悩みは、所得・介護・仕事・健康である。生きがいは家族の幸せや健康。みんな沖繩料理が好きである。

近所づきあいは本島北部と先島で濃く、中南部は希薄である。地域の行事や祭りには中高年層が積極的に参加する一方、若者の地域離れが進んでいる。模合あひは四割の人が参加している。伝統的な祖先崇拜は八七パーセントの人が大切に考えている。位牌の継承は、半ばが男女ど

ちらが継いでもいいとし、若者は女性の継承に理解を示している。復帰前とはだんぶん変わってきた。ユタに相談しない人が四分の三を占めるが、地域的には宮古で相談する人が多い。

沖繩人であることを誇りに思う人が、世代を通して八割以上いる。県民の特性については、人情が厚く助け合いの精神も強いが、のんびりしていると思っている。本土出身者に違和感がないとする人は六五パーセント、特に北部に高い。

九割の人が方言に愛着をもち、また世代が高くなるにしたがって愛着度が強い。方言を自在に使える人は五六パーセント、聞けるが話せない人が二四パーセント、ある程度聞ける人は一六パーセント、年代別では六〇代以上は九割が自在に使えるが、二〇代では一五パーセントと大きな差がある。一方、子どもたちが方言を使うことへの期待は八割に達する。そして、九二パーセントの人が沖繩文化に誇りを持っている。沖繩文化では三線・エイサー・舞踊に人気が高い。

現代の問題については、失業・不景気・低所得・基地問題・医療福祉に強い懸念をい込んでいる。将来の社会

像は経済的豊かさや安定、そして自然との調和を望んでいる。九割の人が沖縄戦体験を語り継ぐことを支持し、若い世代にもっと語り継ぐべきだとの意見が多い。沖縄の自衛隊基地の将来については、縮小・撤去の意見が、

現状維持を少し上回るが、わからないという意見が二割ある。ほぼ半数の人が天皇・皇室に親しみをもち、それは女性に多く、地域的には北部で高く宮古で低い。ここ三〇年間で意識が大きく変わった一つである。近現代の出来事については、全世代で過半数が沖縄戦と答え、ついで日本復帰、基地縮小、沖縄サミットの順に関心が高い。

以上が「県民意識調査」結果の要約である。これは一つのイメージとしてのウチナンチュ像である。

### 戦後沖縄の歴史をふまえて

#### ―『民衆と社会教育』の成果

戦後日本は、日本国憲法において国民主権・民主主義・平和・学ぶ権利・男女平等などを高らかに謳い、先人たちは新しい国民社会と文化を創造する努力を重ねて

きた。ここ数年の教育基本法・社会教育法改正や有事法制整備などの動きは、国民の意識と歴史に反するものである。

一方、沖縄において戦後日本をみずえるならば、日本が一九五二年に占領を解かれ国際社会に復帰したとき、日米安保条約が締結され、沖縄は米軍の占領（施政権）下におかれ続けることになった（奄美は一九五三年に日本復帰）。占領状態、つまり日本国憲法・教育基本法・社会教育法等の外におかれ、それは一九七二年まで戦後二七年間つづく。その間の米軍問題や経済・生活問題は、復帰後三〇年たつ現在も解決されていない。

日本社会とくらべると、沖縄は特異な戦後を歩んできたのであり、社会教育においてもそうである。しかし、米軍占領下におけるさまざまな厳しい制約のなかで、多くの人々の努力によつて社会教育活動は粘り強く展開されてきた。そのことをはじめて研究的・実証的に明らかにしたのが『民衆と社会教育―戦後沖縄社会教育史研究』（小林文人・平良研一編著、エイデル研究所、一九八八年）である。その研究前史として小林文人グループは、『沖縄社会教育史料』（全七集）を編集・出版している。

これらは、沖縄の社会教育を、あるいは日本の社会教育を考えるうえで、たいへん重要な成果だと思う。

『民衆と社会教育』は、現代の沖縄社会教育の課題とながっている。現在では手に入りがたいと思うので、その目次を紹介しておきたい。「戦後沖縄社会教育のあゆみ」、「戦後初期アメリカ占領下の社会教育・文化政策」、「戦後沖縄の社会教育法制」、「占領下沖縄の社会教育財政」、「琉球大学の拡張・普及運動」、「琉米文化会館の展開過程」、「琉球政府下、公民館の普及・定着過程」、「沖縄公共図書館の成立と展開」、「博物館の変遷」、「戦後地域婦人団体・PTAの成立と展開」、「祖国復帰運動と青年運動」、「復帰後沖縄の社会教育」、「沖縄社会教育の視点と課題」、「被差別部落と沖縄」。

一九九〇年代も、小林文人グループをはじめとする多くの研究者、各地で社会教育活動に携わっておられる方々が沖縄を訪れ、調査研究と交流が深まった。その刺激をうけつつ、沖縄においても自分たちの地域の社会教育活動を発掘し評価する動きが少しずつでてきた。

## 沖縄における社会教育実践

全国集会に向けてまもなく『沖縄の社会教育実践—自治・文化・地域おこし』（小林文人他編著、エイデル研究所）が出版される。戦後沖縄の社会教育の歩みをふまえ、いま各地で活動している事例を数多く紹介している。全二〇章と記録資料で構成され、解説を含めると七六項目が収録されている。このようなかたちで、沖縄各地・各分野の社会教育実践が網羅されるのは初めてのことである。今回の全国集会での沖縄からの事例報告を支える内容である。章タイトルを紹介する。

沖縄戦後史と社会教育実践、琉球政府社会教育行政の歩みと沖縄県生涯学習施策の展開、集落公民館と地域おこし、公立公民館の展開、祭りと芸能、地域史・字誌づくり、青年会活動、環境問題、図書館と文庫活動、地域博物館・資料館活動、地域文化運動と地域間交流、文化ホールの展開、女性の活動、高齢者の活動、教育隣組・子ども会、平和・戦争と基地、地域と学校、地域保健と地域福祉、地域と大学、明日へのメッセージ、である。

タイトルからも、沖縄における社会教育活動の多彩さが読みとれるであろう。キーワードの一つは地域および地域社会（集落）である。全国各地の都会、また農山村過疎地でも地域社会は崩壊した、あるいはしつつかあるという。地域社会の実体は学区区だともいう。現代の地域社会をどのようにつくっていくのか、つくり直していくのかは社会教育の基本課題であろう。

ここで沖縄の社会教育の現況をすべて紹介することはできないので、沖縄にやや特徴的な集落・地域社会を取りあげることにする。

沖縄における社会教育活動の基盤は、多く集落（字・行政区）である。集落は自治を基礎に存在、運営され、自治体は集落を根拠に成立している。小中学校もそうである。このことは、農村地域や中小都市では普通のことである。もちろん、沖縄でも都市部で新しく市街地化・住宅地化したところでは自治会が中心である。全国集会において、沖縄からの事例報告はしつかりと集落（地域社会）を踏まえていることに特色が出てくるだろう。

地域おこしは、実体のある集落自治に基づいた活動であり、集落公民館はその機関であり、場である。これは

沖縄に限られたことではなく、全国各地で普通に実践されている活動と思う。

祭りや芸能が社会教育のテーマとされることは少ないが、各地の豊年祭はじめとする年中行事は集落の組織を基礎にし、集落の祖先のカミにかかわる公的な行事である。たとえば、豊年祭の主役は青年たちである。かなりの練習期間、先輩たちの指導を受けつつ、同世代同士が練習に汗を流す。ここでは、地域文化の継承が行なわれると同時に、地域社会（集落）を担う次世代の育成（人づくり）が進められている。復帰後、沖縄各地で地域の伝統行事の復活に取り組まれてきた。どこでも集落を基盤に、このような関係での活動と評価できる。

字誌づくりも同じである。個人レベルでは、地域研究というかたちの生涯学習活動であるが、集落を根拠とする地域文化活動であり、社会教育活動である。

自治体行政の課題は、このような性格をもつ集落組織とその諸活動を評価することであろう。私たちの足元においても、まだまだ評価が少ないように思う。全国集会の六つの課題別学習会や二二の分科会において、全国各地の集落地域社会レベルの活動事例が報告・交流される

とありがたい。

沖縄においても、従来の社会教育課題に加えて、各地の地域づくり、青年エイサー、芝居づくり、エコツーリズム、人権回復運動、障害者、NPO、環境問題、ゴミ問題、保育園や学童クラブ、総合的学習、地域間交流、ジェンダー、アメラジアン問題、平和、長寿、健康、保健、医療、カウンセリング、芸能、食文化、字誌・市町村史づくりなど、社会教育の課題として位置づけ、取り組む必要のあるテーマが多くある。とくに社会教育行政が評価しサービスすべき課題が多い。

『沖縄の社会教育実践』の本を通して、ようやく沖縄各地の様子が覚えてきた感じがする。私たちの足場は自分たちの地域であるが、フットワークを軽くして、沖縄の地域間、そして人とのネットワークをつくっていききたいと願っている。さらにそれが全国各地の人々と活動につながっていくことを願っている。今回の全国集会が、沖縄の私たちにとってそのような機会となればありがたい。

(なかむら・せいじ||名桜大学)